大学日语专业高年级教材

にほんご 日语

（第六册）

陈生保
胡国伟 编
陈华浩

上海外语教育出版社

大学日语专业高年级教材

日　语

第六册

上海外国语学院日语系

陈生保

胡国伟　陈华浩

阜阳师范学院图书馆
藏书

上海外语教育出版社

大学日语专业高年级教材
日　语
第　六　册
上海外国语学院日语系
陈　生　保
胡国伟　陈华浩　编

上海外语教育出版社出版
（上海西体育会路 119 号）
北京印刷一厂排版
新华书店上海发行所发行

787×1092毫米　1/16　20.25印张410千字
1986年9月第1版　1986年9月第1次印刷
印数：　1—5,000册
统一书号：7218·193　　定价：2.95元

关于本册教材编辑体例的若干说明

本册教材供大学日语专业三年级下学期使用，共十二课，每课由课文、注释、新词新语、学习指南、语法句型和词语、练习、课外读物、附录等八个部分组成。每一课用多少学时，可视学生水平、课文长短和难易程度而定，不必强求一律。以我院日语系为例，平均每一课的上课时间为十学时。

（一）课文——绝大部分都选用原作。凡出自外语教育需要对原文作过删节的，编者都在课文末尾作了说明。

（二）注释——对于课文的作者和课文中出现的重要的人物、事件、地名、书刊，以及其他一些不易了解的事物，均作简要的注释。

（三）新词新语——编者从读音、词义、用法、搭配等角度判断，认为是新出现的词语（也有个别语法现象），都列入本项，各条词语都有日文解说和汉译，个别形义与中文完全相同的词语，则略去解说和汉译。

（四）学习指南——为了促使学生深入地理解课文，并培养他们独立思考的能力，编者就课文中较难的地方，作启发性的提示或伏笔性的提问。

（五）语法句型和词语——编者从课文中出现的新的语法、句型、词语中，选出值得举一反三，重点学习的条目，按出现的次序排列，并对它们的接续法、呼应关系以及使用方法逐一进行说明。每条都附三至五个例句。所有的例句均附译文，以便于读者自学。

（六）练习——练习共有九种形式，可分为三大类：汉字写假名、假名写汉字以及造句，属于基础性练习；词语整理、问答以及改写、缩写，属于活用性练习；日译中、中译日和实力测试，属于综合性练习。

练习部分用口头还是用笔头来做，可由教师按具体情况决定。只是其中的问答部分，最好用口头进行。

练习部分第九项的实力测试，采用了日本学校常用的试题方式。这是为了从多种角度进行训练，以提高学生的日语能力，同时也考虑到去日本学习的人越来越多，以便使大家习惯这种考试形式。

（七）课外读物——尽量选择与课文有联系的文章，这是为了在语言上起到复习、巩固和扩展的作用；在内容上对课文有所补充。编者只对个别难读的汉字注了音，加了少量的注。

（八）附录——由词语之窗和文章广场两部分组成。词语之窗列入了若干读音复杂、搭配丰富的词，这是为了给在学习上尚有余力的学生提供一些语言素材。这些列入的词，都只是罗列了一些与之有关联的常用词语，部分较难的词语附了译文。

文章广场提供了关于文体和日语写作的一些基本知识。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

前　言

随着中日关系日益密切，两国各方面的交流日趋频繁，我国学习日语的人数与日俱增。新中国成立以后，特别是近几年来，虽然已经出版了几种供日语专业低年级使用的教材，然而，高年级的教材却至今不见闻世。为了满足社会的需要，我们对在我系已使用过六、七轮的教材作了认真修改，现付印出版。

本教材是大学日语专业的高年级精读教材，是我系所编日语基础课教材《日语》（一～四册，上海译文出版社出版）的续篇。全套教材共有四册（五～八册），每学期学习一册，供三、四年级使用，同时也可供已具有日语基础的广大自学者作为进一步提高日语水平的教科书。

本教材的编写原则如下：

（一）注意思想性。所选课文和编写的例句、练习，都注意能对学生有一定的启迪和教育作用。当然，这里所说的教育作用，是就广义而言的。它既包括热爱科学、献身祖国、诚实为人、珍惜友谊；也包括热爱自然、礼貌待人、尊敬师长等等。

（二）注意实用性。我们主要选择反映今日日本的现代题材，尽量做到介绍客观，实事求是。在语言方面，则采用现代的规范语言，不仅要求正确、流畅，而且尽量做到生动、优美，以便使学生能学到地道的日语。

（三）注意实践性。本教材注意培养学生的外语实践能力，希望学生的听、说、写、读、译五种能力全面提高。为此，我们在每课课文之后，都配备了形式多样、内容丰富的练习。

（四）注意文章的趣味性和题材、体裁的多样性。

本教材所选文章，内容上尽量做到活泼生动，饶有趣味；题材方面则有中日友好、日本的社会风貌、伦理道德、文化特色、语言文字、人物历史、自然风光等等；体裁方面，除了一般的记叙文之外，还有评论、随笔、抒情散文、游记、小说、诗歌、传记、讲演、剧本、回忆录、科普文章等等。在第七、第八册中，我们还准备选一些有关论述日本有代表性的几部古典作品的文章，并让学生阅读和欣赏这些古典作品的部分章节。

（五）注意既符合大学日语专业的要求，也照顾社会广大自学者的需要。为此，我们在生词和注释等方面力求详尽；语法、句型和词语部分所举的例句都附有译文；所有难读汉字的字旁都注了读音。

（六）叙述文字全部使用日语，目的是为了培养学生用日语思维的能力。个别较难的地方附了汉语，以供参考。

我们希望使用本教材的教师采用「精讲多练」的教学法。本教材比之低年级基础课教材，不仅课文长度增加，而且语言难度和内容深度也有较大的提高，而上课时间则有所减少。为此，我们建议教师在学生充分预习的基础上，进行重点讲解，减少讲课时间，增加课堂练习时间。在练习的形式方面，可以采用问答、讨论、座谈、讲演等多种方式，并注意把口头和笔头、课内和课外有机地结合起来，使学生不仅彻底理解，而且能够熟练地掌握和应用。

我们希望使用本教材的学生不仅仅满足于读懂文章，而是循着理解——记忆——活用的学习规律，切实地提高听、说、写、读、译五会能力，最终达到准确而熟练地表达思想的目的。为此，除了与低年级时一样，要重视课文的朗读和背诵之外，更需要养成自学和从事科研的习惯和能力，学会熟练地使用原文辞典和各种日文工具书。

在编写本教材过程中，利用和参考了日本几十家出版社所出的初、高中国语教材、教学资料和图书；同时也利用和参考了所能见到的国内出版的一些书刊杂志。教材的课文和课外读物部分都注明了出处，其他部分所

引用的一些语言材料，由于引用的范围很广，涉及的文章、书刊甚多，并大多经过删节或改写，故不一一注明出处。

本教材由上海外国语学院日语系陈生保、胡国伟、陈华浩编写。陈生保担任主编，胡国伟任副主编。编写过程中，曾得到我校院系领导、各位同事以及外语教育出版社的大力支持，同时得到在我系任教的日本籍教师永野隆史先生的热情帮助，在此谨致谢忱。

这部教材的初稿始编于一九七八年秋，自一九七九年二月起在我院日语专业使用；也曾蒙复旦大学、华东师范大学、上海大学、杭州大学、四川外国语学院等兄弟院校的日语专业试用。在付印之前，编者根据我校使用的经验，也吸收了有关各方面的意见，对原教材作了较大的修改。但由于编者水平有限，本教材的缺点和错误在所难免，敬请读者批评指正。

编　者

于一九八五年六月

目録

第一課　近代の夜明け……1
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「先だつ」
「むき出し」
「いく」
「強いる」
「……を後回しにする」
「与る」
「……とはいえ……」
「……ゆえに」
「……にほかならない」
「つつ」
「踏まえる」
「それはそれとして」
練　習
課外読物
福沢諭吉のアメリカみやげ
あぶなかった幕末の日本名ばかりの四民平等
付　録
1　ことばの窓
下　力　相
2　文章の広場――評論文の特質
第二課　ものまね――しぐさの日本文化――……29
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「かねがね」
「……を浮き彫りにする」
「眼目」
「万一」
「……を問わない」
「ふりをする」
「不自由」
「わざと」「わざわざ」
「浴びせる」
「みごと」

「強いて」
「何はともあれ」
練　習
課外読物
模倣と創造
付　録
1　ことばの窓
——然　——感
2　文章の広場——随想文・感想文

第三課　おふくろの消息……53
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「……せいか」
「めんくらう」
「こしらえる」
「よけい」
「ともかく」
「分」
「なにぶん」
「容赦なく」
「……かわりに……」
「思いのほか」
「こたえる」
練　習
課外読物
夏みかん
付　録
1　ことばの窓
番　真　発
2　文章の広場——小説の特質

第四課　詩三編……78
一　大阿蘇
二　富士
三　千曲川旅情の歌
注　釈
鑑　賞
練　習
課外読物
一　現代詩の概観
二　詩六編
木琴
ナヲ飛びする少女
野のまつり
一日のはじめにおいて

川
椰子の実
第五課　うさぎ追いし彼の山……95
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「妙」
「見はてる」
「駆る」
「……てよい」
「さして……ない」
「はたして」
「ひときわ」
「月並み」
「裏づける」
「あえて」
「そのもの」
練　習
課外読物
諏訪渡り
付　録
1　ことばの窓
2　文章の広場——文章を書くために
第六課　戦災者の悲しみ……121
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「……ところの……」
「用を足す」
「……ところへ」
「……ものではない」
「……たら（ったら）」
「高が知れる」
「……におよばない」
「かぎり」
「……を異にする」
「……ばかり」
「またと……ない」
練　習
課外読物
対決
付　録
1　ことばの窓
輪——晴——笑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第七課　四　季……150
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「目に見える」
「……どおり」
「……による」
「……がかる」
「ひいき」
「うって変わる」
「ひとたまりもない」
「見る影もない」
「かけ値」
「ひとかたならず」
「身のほど」
練　習
課外読物
祭り
付　録
1　ことばの窓
——視　——素　月の異名

第八課　他人の目……176
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「恥をかく」
「知る」
「端的」
「追う」
「気まま」
「丸出し」
「いやというほど」
「……といえど（も）
「それ相応」
「……なり……なり」
「毛頭ない」
「後生大事」
練　習
課外読物
文明の旅
付　録
1　ことばの窓

恥　丸
2　文章の広場――書き始めと書き終わり
第九課　自転車……200
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「形容動詞・形容動詞型助動詞＋で＋ならない」
「……こそ＋動詞の仮定形……」
「に」
「……ん（ぬ）ばかり」
「……とはいえ」
「たわいのない」
「……はめになる」
「……こと」
「たかをくくる」
「……と（言わん）ばかりに」
「やっきに（と）なる」
練　習
課外読物
自然と人間
付　録
1　ことばの窓
ぶり・ぶり　――泣き　耳
2　文章の広場――正確な文章
第十課　風景開眼……228
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「働く」
「のみ」
「……なり」
「冴える」
「すなお」
「まみれる」
「……はおろかしも……」
「とり残す」
「……ないではいられない」
練　習
課外読物
冬の山上にて
付　録
1　ことばの窓
――立つ　心
2　文章の広場――推敲について

第十一課　日本語を考える（対談）……251
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「すらすら（と）」
「山坂を越える」
「……からして」
「見よう見まね」
「角が立つ」
「とぎれもなく」
「べらぼう」
「とめど（も）なく」
「あてどもない」
「……に耐（堪）える」
「一点ばり」
「身もふたもない」
練　習
課外読物
古いものと新しいもの
付　録
1　ことばの窓
——作り　即——　——千万
2　文章の広場——日記と手紙を書く
第十二課　水仙……280
注　釈
新しいことば
学習の手引
ことばの学習
「心もち」
「半分」
「……がもとで」
「締まる」
「勘」
「気配」
「ものを」
「……に拍車をかける」
「すれすれ」
「はずみ」
練　習
課外読物
虫
付　録
1　ことばの窓
——咲き　——半分　——払い
2　文章の広場——調べて書く

第一課　近代の夜明け

吉田　精一

一八六〇年（万延元年）、日本政府最初の公式使節団、新見豊前守、村垣淡路守らの一行は、アメリカ船に搭乗、日米通商条約批准のために欧米に派遣された。これに随行した咸臨丸は、わずか三百トン足らずの小軍艦ながら、艦長勝麟太郎以下、日本人の手による最初の太平洋横断を決断し、使節団に先だって三月十七日サンフランシスコに到着した。乗り組みの一人に福沢諭吉がいた。

はじめて西洋の土を踏んだかれらにとって、見るもの聞くものが、驚きの種であった。かれらは西洋人のダンスを見たとき、肩をむき出しにした婦人の服装や、手を取り合い、からだを接して踊る男女の姿態に目をみはった。日本の女性が公開の席で、膚をあらわにすることなどは、「男女七歳にして席を同じうせず。」という封建時代の習慣からは考えられないことだった。それに、男女が物をやりとりする場合でさえも、直接手から手へ渡してはいけないと戒められていたのである。

当時の正装した西洋婦人のスカートは、フープといって鯨の骨や籐の輪骨を入れて、つり鐘のようにふくれていた。日本の使節たちは、外人のスカートがつまっているとすると、下半身がたいへん太っているものらしいと考えた。そこで一人の少年をそそのかし、スカートをつついてそれを確かめさせた。

一方、アメリカの市民たちは、髷を結い、帯刀した侍の行列を、珍奇な動物を見るような目で興味深くながめた。

使節たちはヨーロッパを回ったが、咸臨丸の一行のみは、アメリカから引き返した。途中ホノルルに寄り、プナホの学校の弁論大会に招待された。それは一行の福沢諭吉の興味を引いた。かれは日本に帰ると、やがて公衆の面前で堂々と意見を述べる訓練を、自己の経営する学校に持ち込んだ。

日本の学生は、それまで「口は禍の門」（「童子教」）とか、「多言するなかれ、多言敗多し。」（「孔子家語」）とかいうように教え込まれていたので、人前で声高く自己を主張する風になじめないようであった。このように江戸時代末期の日本と、西欧の文明国との風俗・習慣の隔たりは、きわめて大きかった。

明治維新以後の日本は、それまで持たなかった技術や機械などの移入・利用に努めるとともに、政治形態や経済組織の方面でも西洋に追随するように努めた。風俗や生活の上でも急激に西洋化していった。一八八三年（明治十六年）に落成した日比

谷の鹿鳴館では、政府の高官の夫人や令嬢が、青い目の外国人を相手にして、ダンスをする風景が見られるようになった。こうして幕府の体制下に成人した人たちは、まったく違った二つの時代に生きる思いがあったのである。

このように明治の初期にあっては、西洋化がすなわち近代化であり、「文明開化」に努めることは、日本を封建社会から、近代社会に脱皮させる必要な条件であった。

しかし、風俗や物質生活の上での西洋模倣は容易にできても、精神生活の変革はそう簡単にいかない。江戸時代は世界でも珍しく長い封建社会が維持された。その結果、士農工商の身分制度は堅く守られ、国民は支配階級に忠実であり、でき上がった秩序を守ることがしいられていた。

「知足安分」(足るを知って分に安んじる)というのがその時代のモットーであった。生まれたときから身分が定まり、その外に出ることは許されない。そして一般の国民が、政治向きに口を出したり、政治の方針を批判することは禁じられ、それをすれば処刑されたのである。

近代社会では、身分上の差別が除かれ、才能さえあれば社会の各方面に進出できるようになった。しかし個人の権利をあと回しにし、義務の遂行を先にした前時代の教育はまだ根強く残っていたから、個人の人権の主張や人間平等の近代思想は、なかなか民衆の中にしみ込んでいかなかった。官尊民卑の考え方は、維新以後も長く残っていたのである。

福沢は「学問のすすめ」やその他の著書によって、こうした旧体制や旧思想の束縛を振り切って、人間は本来同等であり、自由・独立の存在であることを、説得力のあるやさしい文章で説いた。その自由・独立を守るためには、知識を開発して合理的な精神を養わなければならない。あらゆる人間が自己に目ざめ、自己の幸福の追求を生きる目的にすべきことを、かれは教えた。それが国家や社会の発展にもつながると、かれは力説したのである。

福沢の影響は大きかった。人々はかれの本を読んで西洋の事情を知り、目を開かれたのである。西洋の翻訳書を一時は「福沢本」と言ったほどであった。日本は急速に近代化し、その速度は世界史上の驚異と言われるが、それには福沢の力が相当強くあずかっていた。

もっとも、近代化がそんなに早く進んだ理由としては、すでに前時代にある程度の土台が準備されていたという事情があった。「いろは四十七文字を習ひ、手紙の文言、帳合ひのしかた、算盤のけいこ、天秤の取り扱ひなど」(「学問のすすめ」)といった、生活に必要な教養を身につけた人々は多かった。だから維新前後の日本人が文字を知っていた率は、世界一とまで言われている。

それに鎖国のため、西洋諸国との広い交渉はとだえていたとはいえ、オランダを通じて西洋の学問・知識は少しずつ移入さ

れていた。それが軍事・天文・地理・医学・化学といった実用の方面にかたよっていたとはいえ、十九世紀の初めには「蘭和辞書」（ハルマ）も編まれ、知名の蘭学者も百名を越えていた。西洋学の研究や翻訳のための役所もできていたのである。

福沢もこうした蘭学者の一人であった。そしてかれを除く西洋の学問を修めた人々は多くは政府の役人や大学の教官となり、日本の近代化を進める役割を果たした。そうした結果として、日本は東洋諸国の中で、最も早く憲法を持ち、国会を開くことができた。また最も早く、鉄道・病院・銀行・郵便などの、近代的施設を備えるとこができたのである。

ところで、急速に社会改革をする時期にあっては、学問も実用的で、すぐ実際の要求に応じうるものが尊重された。真理であるがゆえに役だつのではなく、役にたつゆえに真理だと考える傾向が強かった。「学問のすすめ」にしても、もっぱら「人間普通日用に近き実学」を勧め、そのために「西洋の翻訳書を取り調べ」また「横文字をも読ませ」ることをも主張している。

こうして西洋の文物や制度を学び、「文明開化」を推進することが、当面最も重要だったに相違ない。西洋化することが近代化だと信じることにも、それだけの理由はあった。しかしそれはその一面において、日本の伝統的な文化をすべて無価値だとする偏見、古いものを捨てて、新しいものにつくことのみが正しいという行き過ぎをも生じたのである。

ドイツの医者で、日本に招かれて、東京大学医学部の創設にも関係したベルツは、何人かの日本人に日本の歴史のことを尋ねた。するとある一人は、「実に日本は野蛮至極であった。」と答えた。他の一人は顔を赤くして、「われわれは歴史を持っていない。われわれの歴史は今から始まるのだ。」と叫んだ。

それを聞いたベルツは、「今日の日本人は自分の過去について、何事も知ることを欲していない。」と考えた。そして、「日本固有の文化を、こんなふうに軽蔑することは、国威を外人に対して宣揚することにはならない。古代の文化でも、合理的なものは尊敬すべきである。伝統を基礎としないで、そういう態度をとることは非常に損である。」という意味の感想を、明治九年の日記の中に書きつけている。

事実として、日本の文化は、イギリスやフランスなどにも負けない、長い歴史を持っている。その間に、特殊な風土と国民性に根ざした文芸作品や美術を生産している。それらを産んだきめの細かい感情や微妙な感覚は、他国人に見られないほどに洗練され、優雅であった。

新しい社会は、新しい知識とともに、また人間の自然の性情に基づいて発生する新しい芸術を要求する。それはいくら外国からの影響を受けても、借り物でない自己を世界の中心にすえ、個性の価値を自覚して、その自由な表現を試みることにほかならない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com